



一本の綱で真剣勝負
第22回まつやま綱引き大会
心をひとつに(松山)

2月4日、松山体育館を会場に「まつやま綱引き大会」が開催され、松山地域から小学生の部8チーム、一般女子の部7チーム、一般男子の部8チームの約300人が出場しました。まつやま綱引き大会は、今回で22回目となる冬の恒例スポーツイベントで、参加した皆さんはチーム一丸となって綱を引き、勝負の行方に応援の皆さんも一緒になって一喜一憂していました。

小学生の部は金ヶ崎チーム、一般女子の部は駅前中チーム、一般男子の部は入町チームが優勝しました。



地元の中学生も事例発表を行いました
ラムサールフェスティバル2007
湿地とまちづくりを考える(田尻)

2月3日・4日の2日間、田尻文化センターを会場に、「蕪栗沼、周辺水田」のラムサール条約登録湿地1周年を記念して「ラムサールフェスティバル2007」が開催されました。全国から約300人が参加し、湿地をまちづくりに生かす取り組みなどについて、全国各地の活動報告や事例発表、パネルディスカッションなどが行われました。また、蕪栗沼でのマガンの朝の飛び立ちの観察、「ふゆみずたんぼ」を実践している伸筋地区のほ場見学なども行われ、地域の取り組みを全国にアピールする機会になりました。

2月3日の節分の日、古川の中心商店街で恒例の豆まきが行われました。これまで台町商店街振興組合が毎年実施してきましたが、今年は中心市街地の6つの商店街が合同で行いました。秋田県男鹿半島から取り寄せた鬼の面をつけた「鬼」と袴姿の役員や子どもたちが東西2班に分かれて各商店をまわり、「鬼は外、福は内」と威勢のよい掛け声とともに古川産大豆ミヤギシロメをまき、商売繁盛と家内安全を祈願しました。終了後は参加者全員で恵方巻きを食べ、今年一年の幸せを祈りました。

中心商店街で豆まき
鬼は外！福は内！(古川)



「いたたた！」鬼も逃げ出す商店街のパワー

2月8日、三本木小学校の1年生が三本木幼稚園を訪れ、4月に小学校に入学する年長組の皆さんに、小学校の一日の様子を紹介しました。

約1年ぶりの懐かしい園舎や先生に再会して、少し照れた様子の1年生の皆さんでしたが、後輩たちが安心して小学校に来てくれるようにと、朝の会や授業の様子、学校行事のことなどを寸劇仕立てやユーモアを交えて紹介。お兄さんお姉さんたちの楽しい演技に、年長組の皆さんから笑顔があふれました。小学校へ行くのが楽しみですね。

1年生が幼稚園を訪問
小学校の1日を教えるよ(三本木)



小学校は楽しいよ。みんな待ってるネ！



みんなで作る伝統の粥
凛菜・上の家 あかつき粥を食べる会
一年間の無病息災を願って(岩出山)

2月10日、「凛菜・上の家」を会場に「あかつき粥を食べる会」が行われました。

凛菜・上の家の広大な庭や裏山の手入れなどをしてくれるボランティアの人たちや地区の高齢者と子どもたちなど、約50人が招待されました。あかつき粥は小豆粥を旧正月に食べる伝統行事で、一年間の無病息災を願うものです。この日は、小豆粥のほかに雑煮餅やあんこ餅、煮込みこんにやくなどの料理が並び、招待された人たちは、地域の伝統の味に舌鼓を打っていました。



日々の活動の賜物です
活動が評価されました(鹿島台)

特定非営利活動法人シナイモツゴ郷の会が農林水産省主催「平成18年度田園自然再生活動コンクール」で農林水産大臣賞を受賞し、1月26日、「田園自然再生シンポジウム」において表彰されました。

このコンクールは、自然と共生した農村づくりを推進する目的で実施されているもので、シナイモツゴの人工繁殖、地元小学校での人工繁殖の支援、外来種の駆除、営農組合と連携した生息環境の保全といった田園地帯の自然を再生する実践的な活動が評価され、今回の受賞となりました。



先生、私の作品どうですか？



工夫を凝らした試作品の数々。どれも美味しそう！

鳴子の米プロジェクト
鳴子を日本農村の希望に(鳴子)

昨年の秋から進められている「鳴子の米プロジェクト」では、民族研究家の結城登美雄さんを総合プロデューサーに迎え、農家、婦人会、旅館、菓子店など、地域全体でネットワークを結びながら、米作りには不向きと言われてきた中山間地である鳴子で取れた米の価値を高めるための研究を重ねてきました。

1月31日には、鳴子公民館を会場に、東北181号の米粉を使った料理やお菓子などの試作品発表会が行われ、地域内の菓子店や飲食店、婦人会など4団体8業者から、はっと汁、しそ巻き、まんじゅう、ゆべし、ピザ、シュークリーム、ケーキ、クッキー、パバロアなど、多彩な30品を越えるメニューが出品され、どれもすぐに商品化できるほどの出来栄となりました。

結城プロデューサーは「現代は、『物』ばかり見て、『人が作った物』であることに注目がいかず、安いことだけが良いという時代。生産者が安心して来年もがんばって作れる米を目指し、鳴子が日本の農村の希望の場所になってほしい。」と話していました。